

「新型コロナウイルス感染症が収束するまでの暫定的な試合・審判法」 運用に伴うトップレベル男女剣道選手の技術傾向の変容

Change in Technical Trend of Top-level Men and Women Kendo Players by Applying
The Provisional Regulations of *Shiai* and *Shinpan* until COVID-19 will be Controlled

キーワード：鏝競り合い, 打突, 攻め

Keywords: *Tsubazeriai*, *Datotsu*, *Seme*

瀬川 剛 大野 達哉¹⁾

Segawa Go Ohno Tatsuya

¹⁾ サレジオ工業高等専門学校
Salesian Polytechnic

Abstract

This research, analyzing and comparing performed *datotsu* and *seme* style at quarter finals and above, in total 55 matches, of All Japan Kendo Championships (men's and women's) in 2018 and 2019 before applying "The Provisional Regulations of *Shiai* and *Shinpan* until COVID-19 will be Controlled" and those in 2020 and 2021 after its application to clarify change in technical trend of top men's and women's players due to the application, acquired valid findings to help coaching kendo players.

Regarding performing *datotsu*, while *kote* increased in targeted part at men's matches, *ippon-uchi* in men's matches and both *renzoku-waza* and *kaeshi-waza* in women's ones increased respectively in *waza* category. While *hiki-waza* increased in men's matches, no change was found in women's ones. Regarding *dehana-waza* and *katsugi-waza*, a high proportion was found in men's matches both before and after applying the Provisional Regulation. Regarding *seme* style, "narrowing down *maai* by keeping one's *kamae*" increased both in men's and women's matches and "datotsu motion (feint)" and "lowering *kensen*" decreased. "Narrowing down *maai* with defensive posture" was found in a certain proportion both in men's and women's matches before and after the application of the Provisional Regulations.

The above results showed kendo's excitement in match development such as performing *waza* by keeping *kamae* and *kaeshi-waza* against opponent's *datotsu*, etc. On the other hand, technical trend of avoiding risks to win such as *seme* style of narrowing down interval(*maai*) with defensive posture and an increase in *kote*'s frequency was also found.

はじめに

本研究の経緯

2019年末より世界各国で猛威を振るっている「新型コロナウイルス(COVID-19)」は、日本国内においても2020年1月28日に海外渡航歴のない男性の感染が確認されたのを皮切りに、感染が拡大していった。その後、幾度となく感染の再拡大や緊急事態宣言等が発令されるなど、現在に至るまでに日常生活にかなりの制限を強いられている。

感染の拡大は、日常生活だけでなく2020東京五輪の延期をはじめ、スポーツ活動においても強力な制限を設けざるをえなくなった。剣道においても例外ではなく、特に約2m以内の至近距離で向かい合い、発声をともないながら競技を実施するという特性上、感染源となりうる口からの飛沫飛散が非常に多いことも事実である。当時、厚生労働省¹⁵⁾が「新しい生活様式」の実践例の中で「3密(密閉, 密集, 密接)の回避」を求めているが、特に剣道の競技中は「3密」に該当する可能性が高い。そこで、全日本剣道連盟(以下、全剣連)は2020年4月5日付で「新型コロナウイルス感染症の集団発生を防止するためのお願い」²⁸⁾として当面の間の対人稽古中止を呼びかけた。対人稽古中止要請は、緊急事態宣言解除後も続いたが、その後、用具の使用によって飛沫の飛散を一定程度防止できることが確認され、2020年6月10日に解除と共に「対人稽古再開に向けた感染拡大予防ガイドライン」²⁹⁾が策定され、ウィズコロナの稽古方法が示された。その大きな特徴が、いわゆる「面マスク」及び「フェイスシールド」の着用と「鏝競り合い」の回避である。さらにこれを踏まえた「主催大会実施にあたっての感染拡大予防ガイドライン」²⁹⁾を2020年8月27日に公表した。その中で、「新型コロナウイルス感染症が収束するまでの暫定的な試合・審判法」¹²⁾(以下、暫定ルール)に関しては、全国9ブロックで講習会を行い、全日本剣道連盟主催大会をはじめ、各カテゴリーの大会においてもその運用を求めた。

この暫定ルール運用後、剣道では2021年3月の全日本剣道選手権大会及び全日本女子剣道選手権大会を皮切りに、全剣連主催の大会が数回行われて

きた。全剣連試合・審判委員会委員長の香田¹³⁾は、暫定的なルールを適用して行われた先の大会と2019年度的全日本選手権大会(男女)と比較し、試合時間及び鏝競り合い平均時間が減少したこと、発現打突・有効打突における引き技の割合が減少したことなどを明らかにしている。池田ら⁵⁾の九州学生剣道大会(団体戦)を対象に過去3年間の大会と試合内容を比較し、その上で出場した試合者及び審判員の意識について検討した報告もみられた。その結果、引き技の発現頻度は減少しておらず、鏝競り合いの短時間での解消が引き技を消失させるという指摘には至らないとしている。一方で、反則数は減少しており、試合内容が改善すると思われる傾向が認められた。つまり、これらの報告はこの暫定ルールの適用は、感染症予防のみならず、剣道の試合内容に影響を与えることを示唆している。特に、剣道の試合における鏝競り合いの問題は長年の懸念事項であり、「永遠の課題」とまで言われてきた。これまでも様々な議論がなされてきた経緯もあり、その解決の糸口になるとも考えられる。

鏝競り合いについて

今回の暫定ルールで最大のポイントは事実上の「鏝競り合いの禁止」である。全剣連試合・審判委員会³⁰⁾はあくまでもこの運用は、「剣道試合・審判規則、細則」の変更ではないとした上で、『剣道試合・審判・運営要領の手引き』『規則の解釈と運用』『つば競り合いについて』の文言の具現化が感染症予防に効果が大いことから、解釈をより厳格化し規則の運用を行うものであるとしている。具体的には、試合者は、鏝競り合いを避けること、やむを得ず鏝競り合いとなった場合は、すぐに分かれるか引き技を出し、掛け声は出さないこと(引き技時の発声は認める)、審判員は鏝競り合いを解消しない場合には、ただちに「分かれ」を宣告することとしている。

だが、問題は医学的配慮に止まらない。そもそもこの鏝競り合いに関する問題は、剣道界でも古くから取り上げられてきた。そこで、これまで先行研究及び指導書の中で鏝競り合いについてどのように記載され、問題意識を保有されてきたのか、明らかにしていきたい。

研究の分野においても古くからこの問題が取り上げられてきたことがわかる。まず、警察大学の教授を務めた滝沢²²⁾の全日本剣道選手権大会全試合55試合を対象にした研究が見られる。その中で、鏝り合いは試合時間の25%を占めており、別れる際も審判員の指示があったものが82%に上るとしている。これは戦前見られた払い、足がらみ、組打ち等が違反となり、緊張感にかけるものになっていること、また試合者・審判員双方に引き技の技術が乏しいからであると述べている。巽²³⁾は男女の全日本学生大会で試合中の鏝り合い時間は全体の4割以上を占めるとしており、全日本選手権大会に比べ、長いことを明らかにしている。阿比留²⁴⁾は、高校・大学・一般の全国大会における試合中の鏝り合い時間を比較し、練度が高まるにつれて、総試合時間に占める鏝り合い時間は少なくなり、間合の攻防や打突行動が試合内容の大半を占めていることが明らかになったとしている。

そもそも、剣道指導要領²⁶⁾によれば、鏝り合いとは相手を攻撃したり、相手に攻撃を加えてきたときに、互いに体が接近して鏝と鏝がせり合う状態であるとしている。その上で、指導上の留意点として、試合上の駆け引きで時間の引き延ばしをはかったり、攻撃の休み時間ではなく、積極的な攻撃の機会を作る場であると認識させることを上げている。

今井⁶⁾は指導書の中で鏝り合いはその後の勝負を有利に展開できるかどうかの瀬戸際であり、極めて大切な一瞬であるとしている。しかし、現在の試合では悪用する者も多く、非常に見苦しいと苦言を呈している。また、古川⁴⁾は本来危険な状態であるはずの鏝り合いが実際には「打たれたくない、休みたい」という気持ちから安易に相手と接近する、ボクシングのクリンチのような状態になっていると指摘している。その上で、長く行えば行うほど相手の警戒心が強くなり隙がなくなってしまうとし、鏝り合いになった一瞬を的確に捉えられるように日頃から稽古を積むことが大切であるとしている。

もう一方で重要になるのが審判員の意識である。香田⁹⁾はその着眼点として正しい鏝り合いをしているか、打突もしくは別れる意志があるかを上げ、剣道試合・審判規則第一条の公明正大さに欠ける場合

は不当な鏝り合いとして直ちに反則を取るべきとしている。その上で、技を出そうと競い合っているが出せない膠着状態と時間空費など不当な鏝り合いは異なるとして、冷静な判断を促している。

最後にルール変更での対応を見ておきたい。國分¹⁴⁾はルールの変遷を明らかにする研究の中で鏝り合いを取り上げ、鏝り合いの解消は審判主体になっていた規則から、試合者双方に委ねられた規則となり、正しい鏝り合いを遂行させ、緊迫感と積極的な技の引き出しに終始工夫してきたとしている。また、それぞれのカテゴリーでは独自のルールを設ける対応を行っているケースもある。全国高等学校体育連盟剣道専門部は申し合わせ事項によって試合者は、正しい鏝り合いの攻防から10秒以内に技を出すか、または、相互に間合を切って鏝り合いを解消しなければならないと定めている。また、警察剣道試合及び審判要領²⁴⁾では、禁止行為である足がらみの中で、「鏝り合いとなった後、右(左)足で相手の左(右)足を外側から払うことを除く」という条文を明記している。これにより、安易な鏝り合いをしていると相手に足払いをされるという緊張感が生まれるのも事実である。

以上のように、剣道では常に引き技と鏝り合いについて、試合者・審判員・観客三者三様の問題を内包してきた。その都度、公明正大な試合展開を望み、試合・審判規則を改定してきたが、問題の抜本的改革には繋がらなかった。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大という未曾有の危機を迎えたことで、この長年抱えてきた問題が解決へと向かうことが予想される。

先述の先行研究⁵⁾¹³⁾はその兆候を示したが、一方で、鏝り合いとそれに伴う引き技にのみ焦点を当てており、試合者の技術傾向がどのように変化してきたかについては言及されていない。

本研究の目的

暫定ルール運用前の2018・2019年度と運用後の2020・2021年度の全日本剣道選手権大会(男女)準々決勝以上、計55試合を対象に発現する打突及び攻め方の比較・検討を行うことで暫定ルールが男女トッ

プ選手の技術傾向にどのような変化を及ぼしたのかを明らかにすることを目的とする。

方法

対象大会及び試合

暫定ルール運用前の2018・2019年度に開催された第57・58回全日本女子剣道選手権大会、第66・67回全日本剣道選手権大会と暫定ルール運用後の2020・2021年度に開催された第59・60回全日本女子剣道選手権大会、第68・69回全日本剣道選手権大会を対象とし、各大会準々決勝以降の7試合、計56試合から上段選手の試合(第58回全日本女子剣道選手権大会準々決勝第2試合)を除いた55試合を分析した。男女及び運用前後、各2大会を集計し、各項目でそれぞれ比較・検討を行った。

分析方法

対象試合の映像資料は、全日本剣道連盟が公表している動画を再生し、女性を含む剣道有段者3名で先行研究を参考に作成した分類項目に準じて分類・集計し、検討した。

分析対象

分析対象は、対象試合で発現された技、攻め方とした。

- 本研究では、打突の要件を以下のように判断した。
- ・竹刀の打突部で相手の打突部位(メン・コテ・ドウ・ツキ)の4種類を打突していること。
- ・打突の際に声を発していること。
- ・踏み込み動作を行っていること。(胴技は踏み込まない場合もあるので例外とした。)

分析項目

1. 打突について

(1) 発現した打突の打突部位

対象試合で発現された打突の部位は「メン」「コテ」「ドウ」「ツキ」と分類・集計した。

(2) 発現した打突の技

対象試合で発現された打突を、剣道指導要領26)

の技の項目に基づき以下の通り分類・集計した。

しかけ技は「一本打ちの技、連続技、払い技、捲き技、出ばな技、引き技、かつぎ技」の7項目、応じ技は「抜き技、すり上げ技、返し技、打ち落とし技」の4項目、計11項目とした。

2. 攻め方について

対象試合で発現された打突直前の攻め方を先行研究²¹⁾に基づき、以下の通り分類・集計した。

攻め方の分類は、「剣先を回す」、「打突モーション(フェイント)」、「相手の竹刀を上から押さえる」、「竹刀を頭上に大きく振りかぶる」、「相手のつば元を叩き牽制する」、「腕を伸ばして相手の喉元に剣先を付ける」、「剣先を下げる」、「構えを維持し間合をつめる」、「防御の体勢で間合をつめる」「剣先を開く」の10項目を分類項目とした。

結果

1. 打突について

(1) 発現した打突の打突部位

表1、2には男子、女子の対象試合で発現した打突(男子:運用前264本・運用後242本、女子:運用前521本・運用後372本)の部位別の割合と本数を示した。男女で前後ともにメン、コテ、ドウ、ツキの順で発現割合が高かったが、男子ではコテの割合に差が見られ、運用後が運用前よりも高かった。

表1. 発現した打突の部位別の割合(男子)

打突部位	男子	
	運用前 割合(%) (本数(本))	運用後 割合(%) (本数(本))
メン	67.0 (177)	56.2 (136)
コテ	28.4 (75)	38.0 (92)
ドウ	3.0 (8)	2.1 (5)
ツキ	1.5 (4)	3.7 (9)

表2. 発現した打突の部位別の割合(女子)

打突部位	女子	
	運用前	運用後
	割合 (%) 〔本数(本)〕	割合 (%) 〔本数(本)〕
メン	67.0 〔177〕	61.0 〔227〕
コテ	28.4 〔 75〕	33.3 〔124〕
ドウ	3.0 〔 8〕	3.2 〔 12〕
ツキ	1.5 〔 4〕	2.4 〔 9〕

(2) 発現した打突の技

表3には男子の対象試合で発現した打突の技別の運用前後の割合を示した。運用前は一本打ちの技、出ばな技、連続技、引き技、かつぎ技、返し技、抜き技、打ち落とし技、すり上げ技、払い技の順で、捲き技は見られなかった。運用後は、一本打ちの技、連続技、出ばな技、返し技、かつぎ技、引き技、抜き技、打ち落とし技、払い技、すり上げ技の順で、捲き技は見られなかった。

発現した技の割合では、運用前と運用後で差が見られた。一本打ちの技の割合は運用後が運用前よりも高かった。一方で、引き技の割合は、運用後が運用前よりも低かった。

表4には女子の対象試合で発現した打突の技別の運用前後の割合を示した。運用前は、一本打ちの技、引き技、出ばな技、連続技、返し技、かつぎ技、抜き技、打ち落とし技、すり上げ技、払い技の順で、捲き技は見られなかった。運用後は、一本打ちの技、引き技、連続技、返し技、出ばな技、かつぎ技、抜き技、すり上げ技の順で、打ち落とし技、払い技、捲き技は見られなかった。

発現した打突の技別の割合では、運用前と運用後で差が見られた。連続技と返し技の割合は運用後が運用前よりも高かった。一本打ちの割合は運用後が運用前よりも低かった。

表3. 発現した打突の技別の割合(男子)

技名称	男子	
	運用前	運用後
	割合 (%) 〔本数(本)〕	割合 (%) 〔本数(本)〕
一本打ちの技	53.8 〔142〕	59.5 〔144〕
連続技	10.2 〔 27〕	10.7 〔 26〕
払い技	0.4 〔 1〕	1.2 〔 3〕
引き技	9.1 〔 24〕	3.3 〔 8〕
かつぎ技	7.2 〔 19〕	4.5 〔 11〕
捲き技	0.0 〔 0〕	0.0 〔 0〕
出ばな技	9.5 〔 25〕	10.3 〔 25〕
抜き技	2.3 〔 6〕	2.5 〔 6〕
すり上げ技	0.4 〔 1〕	0.4 〔 1〕
返し技	6.4 〔 17〕	5.8 〔 14〕
打ち落とし技	0.8 〔 2〕	1.7 〔 4〕

表3. 発現した打突の技別の割合(女子)

技名称	女子	
	運用前	運用後
	割合 (%) 〔本数(本)〕	割合 (%) 〔本数(本)〕
一本打ちの技	68.3 〔356〕	59.1 〔220〕
連続技	4.4 〔 23〕	9.7 〔 36〕
払い技	0.4 〔 2〕	0.0 〔 0〕
引き技	14.8 〔 77〕	12.1 〔 45〕
かつぎ技	1.7 〔 9〕	3.0 〔 11〕
捲き技	0.0 〔 0〕	0.0 〔 0〕
出ばな技	5.4 〔 28〕	6.2 〔 23〕
抜き技	1.7 〔 9〕	1.9 〔 7〕
すり上げ技	0.4 〔 2〕	0.5 〔 2〕
返し技	2.5 〔 13〕	7.5 〔 28〕
打ち落とし技	0.4 〔 2〕	0.0 〔 0〕

2. 攻め方について

表5には男子の対象試合で発現された打突直前の攻め方(運用前272回, 運用後237回)の割合と回数を示した。運用前は「構えを維持し間合をつめる」, 「打突モーション(フェイント)」, 「防御の体勢で間合をつめる」, 「剣先を下げる」, 「剣先を回す」, 「相手の竹刀を上から押さえる」, 「竹刀を頭上に大きく振りかぶる」, 「腕を伸ばして相手の喉元に剣先をつける」, 「剣先を開く」の順で, 「相手の竹刀のつば元を叩き牽制する」は見られなかった。運用後は, 「構えを維持し間合をつめる」, 「防御の体勢で間合をつめる」, 「打突モーション(フェイント)」, 「剣先を下げる」, 「剣先を回す」, 「腕を伸ばして相手の喉元に剣先をつける」, 「剣先を開く」, 「相手の竹刀を上から押さえる」, 「相手の竹刀のつば元を叩き牽制する」, 「竹刀を頭上に大きく振りかぶる」の順だった。

発現した攻め方の割合には, 運用前後で差が見られた。「構えを維持し間合をつめる」の割合は運用後が運用前よりも高かった。「打突モーション(フェイント)」, 「剣先を下げる」の割合は運用後が運用前よりも低かった。

表5. 発現した攻め方の割合(男子)

技名称	男子	
	運用前 割合(%) (本数(本))	運用後 割合(%) (本数(本))
剣先を回す	0.4 (11)	5.1 (12)
打突モーション(フェイント)	22.1 (60)	13.5 (32)
相手の竹刀を上から押さえる	3.7 (10)	2.5 (1)
竹刀を頭上に大きく振りかぶる	1.8 (5)	0.4 (1)
相手の竹刀のつば元を 叩き牽制する	0.0 (0)	1.3 (3)
腕を伸ばして相手の喉元に 剣先をつける	1.5 (4)	5.1 (12)
剣先を下げる	15.4 (42)	5.5 (13)
構えを維持し間合をつめる	32.4 (88)	44.7 (106)
防御の体勢で間合をつめる	18.4 (50)	17.7 (42)
剣先を開く	0.7 (2)	4.2 (10)

表6には女子の対象試合で発現された打突直前の攻め方(運用前357回, 運用後312回)の割合と回数を示した。運用前は「打突モーション(フェイント)」, 「構えを維持し間合をつめる」, 「防御の体勢で間合をつめる」, 「剣先を下げる」, 「相手の竹刀を上から押さえる」, 「剣先を開く」, 「竹刀を頭上に大きく振りかぶる」, 「相手の竹刀のつば元を叩き牽制する」, 「剣先を回す」, 「腕を伸ばして相手の喉元に剣先をつける」の順だった。運用後は「構えを維持し間合をつめる」, 「防御の体勢で間合をつめる」, 「打突モーション(フェイント)」, 「剣先を下げる」, 「相手の竹刀を上から押さえる」, 「腕を伸ばして相手の喉元に剣先をつける」, 「相手の竹刀のつば元を叩き牽制する」, 「竹刀を頭上に大きく振りかぶる」, 「剣先を回す」の順で「剣先を開く」は見られなかった。

発現した攻め方の割合には, 運用前後で差が見られた。「構えを維持し間合をつめる」の割合は運用後が運用前よりも高かった。「打突モーション(フェイント)」, 「剣先を下げる」の割合は運用後が運用前よりも低かった。

表6. 発現した攻め方の割合(女子)

技名称	女子	
	運用前 割合(%) (本数(本))	運用後 割合(%) (本数(本))
剣先を回す	1.4 (5)	1.6 (5)
打突モーション(フェイント)	28.0 (100)	13.8 (43)
相手の竹刀を上から押さえる	9.0 (32)	6.1 (16)
竹刀を頭上に大きく振りかぶる	2.8 (10)	2.2 (7)
相手の竹刀のつば元を 叩き牽制する	2.0 (7)	4.2 (13)
腕を伸ばして相手の喉元に 剣先をつける	1.1 (4)	6.1 (19)
剣先を下げる	10.9 (39)	6.7 (21)
構えを維持し間合をつめる	22.7 (81)	42.0 (131)
防御の体勢で間合をつめる	18.2 (65)	17.3 (54)
剣先を開く	3.9 (14)	0.0 (0)

考察

打突について

打突部位別に見ると、男女共にメンが最も多く、コテがそれに続き、ドウとツキが一割程度という比率は暫定ルール運用前後で変化が見られなかった。ただし、男子においてはコテの割合が10%ほど増加する傾向が見られた。暫定的ルール運用による積極的な鏢競り合いの解消は、構えた状態からの攻防を開始する機会の増加に繋がる。香田⁸⁾は、コテがメンに比べ、比較的遠い間合からの小さい踏み込み足での打突が多いことを報告しているが、鏢競り合いから一度、竹刀が触れ合わない距離まで間合を切って攻防を再開する暫定ルールでは遠間での試合展開が増加したと考えられ、それに伴って、コテ打ちが増加したと考えられる。また、打突時のリスクについてもメンに対する応じ技は、出ばな技(メン、コテ)や返し技(ドウ、メン)など選択肢が多いため、繰り出された際の対処(防御)が難しい。一方、小手に対する応じ技は、対応した後の打突部位が多くの場合、メンの一方所に集中しているため、比較的対処(防御)しやすい。したがって、試合者は少しでもリスクが低い打突部位を多く狙い、また、中村¹⁷⁾が報告するコテを牽制や攻め崩しの手段として発現させるようになったのではないかと考えられる。

技別で見えていくと、一本打ちの技の割合が男女ともに高く、これも運用前後で変化が見られなかった。ただ、その増減では男女に差が見られた。男子ではその割合が暫定ルール運用後に53.8%から59.5%に増加した。それに対し、女子では68.3%から59.3%に低下し、同じく仕掛け技では連続技が4.4%から9.7%に増加した。香田¹⁰⁾はその有効性に関して、最初の動作が不十分な時や相手に受け止められた場合に、すぐ次の技を出すことで、相手を追い込んで有利に試合を進めたい状況で生きてくるとしている。試合者も運用後は鏢競り合いが禁止されたことで、一本打ちの技を出した後、安易に相手と接触するのではなく、次の技へと展開したと考えられる。

女子では次に多いのは引き技であり、運用前14.8%、運用後12.1%で若干割合が減少したものの、

この傾向は変わらなかった。これは鏢競り合いの短時間での解消が引き技を消失させるという指摘は当たらないとする先行研究⁵⁾を支持する結果となった。ただ、膠着した鏢競り合いからの打突は認められていないため、相手の打突に対して間を切って技が尽きたところにすかさず引きながら打つ技、体をさばいて打つ技が多く見られた。福本³⁾は指導書の中で、引き技は本来瞬間的な技であり、鏢競り合いに入ってからではなく、瞬時に崩して打つ技こそ剣道本来の妙味であるとしている。暫定ルール運用により、単に引き技が減少しただけではなく、上述のような機会でも繰り出される打突が増加したことは、試合内容が好転していることを示唆するデータと説明できる。一方で男子では9.1%から3.3%に減少しており、鏢競り合いからの引き技は有効打突にならず、もし相互に分かれようと思わかけて故意に技を出した場合は反則になる危険性がある暫定ルール運用後は積極的に引き技を選択せず、鏢競り合いの解消を念頭に置いていると考えられる。そのため、一本打ちの技を積極的に繰り出すようになり、引き技が減少し、その割合が増加したと考えられる。

また女子で増加したのが応じ技の一つ、返し技である。運用前2.5%から運用後は7.5%となった。瀬川²¹⁾は男女のトップ選手の技術傾向を比較し、女子において返し技の少なさを指摘しているが、暫定ルールにより大きく変化したと考えられる。剣道指導要領²⁶⁾では、「応じ技の応じる」ということは単なる「受ける」ということではなく、相手の力を利用して打突することを目的とするとしており、相手の打突をただ単に防御するだけでなく、応じる重要性を説いている。応じ技が増加したことも、試合内容の好転に繋がるデータと考えられる。また、佐藤²⁰⁾は指導書の中で、返し技は難易度こそ高いものの、非常に堅実な技であるとしており、試合者もそれを十分理解した上で、数ある応じ技の中からこの技を選択していると考えられる。

また、出ばな技、かつぎ技に関しては運用前後ともに、男子の方が大きい割合を示し、先行研究を支持する結果となった。

攻め方について

男子において、運用前後を通して最も多く見られた攻め方が「構えを維持し間合をつめる」であり、割合としては、運用前は32.4%から運用後44.7%に増加している。女子においても、同じく運用前22.7%から運用後42.0%と大幅に増加している。暫定ルールでは、鏝競り合いが事実上禁止され、安易に間合を詰めることができなくなり、構え合う時間が長くなったと考えられる。そのため、無駄な動作を排除し、姿勢を維持した状態で攻め入り、打突に繋げるケースが多く見られた。一方、女子においては、運用前に最も多く見られた攻め方は「打突モーション(フェイント)」である。この攻め方は、打つと見せてそれに反応した相手の状態を予測して、そのフェイント動作の流れの中で打突する方法であり、実に28.0%を占めていが、運用後は13.8%と大幅に減少している。男子においても運用前22.1%から運用後13.5%となっており、男女共通で減少したことがわかり、その要因として間合の変化が挙げられる。鍋山ら¹⁶⁾は、剣道の動作開始の二者間距離が近くなれば先手の攻撃が有利な状況になることを報告している。フェイント動作は、試合者が相手に打突の意思を感じるからこそ、手元を上げるなど何らかの反応を起こし、機会が生じる。そのため、間合が近い場合は特に効果を発揮するが、暫定ルールでは接近戦は反則になりかねない事項が多く、試合者は遠間を選択するケースが多いため、減少したと考えられる。また、神崎⁷⁾は指導書の中で、「攻め(崩し)と打突の動作の極小化」として技能が高まるにつれて、単純な一本打ち打突動作の中に、相手への攻めの要素も包括されるような打ち方が求められるとしている。運用後の試合者もフェイントなどの動作を極力控えた攻め方が多く見られたことは、剣道本来の醍醐味が表現される形であり、試合内容が好転した結果であると考えられる。

男女ともに一定数見られた攻め方が「防御の体勢で間合をつめる」である。その変化をみると、男子は運用前18.4%、運用後17.7%で女子は運用前18.2%、運用後17.3%となっている。防御というイメージから消極的な試合展開になるなどの批判もあるが、とりわけ試合において、近年の先行研究¹⁸⁾²¹⁾でその有効性

が指摘されているが、本研究もそれを証明する結果となった。興味深いのは、運用前後でほとんどその割合に変化が見られなかったことである。暫定ルールでは防御姿勢(打突の回避)による相手に接近するような行為は規則第一条に則り、反則とするとしている。そのため、この攻め方から打突が発現されず、間合が接近してしまった場合は上述の行為に該当する危険性がある。それでもこの攻め方が減少しないということは、試合者がその有効性を実感しているからだと考えられる。打たれるリスクを軽減しながら有効打突に結びつけていくためにはこの攻め方を織り交ぜていくことが不可欠な技術であると推察される。

運用前、特に男子で多く見られたのが「剣先を下げる」である。15.4%を占めたが、これが運用後は5.5%と減少した。女子も運用前10.9%から運用後6.7%に減少しているため、暫定ルール運用による影響が高いと考えられる。瀬川ら²¹⁾はこの攻め方について、上述の「構えを維持し間合をつめる」攻め方が多い場合、それに関連してこの攻め方の増加が示唆されるとしているが、先行研究を支持しない結果となった。要因の一つとして考えられることが、出場選手の顔ぶれである。男子においては運用前、警察官の選手がこの攻め方を多用している傾向にあった。運用後は新型コロナウイルス感染症対応のため、警察官の選手が2020年度は一切出場できず、2021年度も予選会の日程によって出場を断念した選手も多かった。次年度以降、そうした選手が多数出場してきた場合、今回の結果が変化するのか否か、動向を注視する必要があると言える。

結論

本研究では、「新型コロナウイルス感染症が収束するまでの暫定的な試合・審判法」運用前の2018・2019年度と運用後の2020・2021年度の全日本剣道選手権大会(男女)準々決勝以上、計55試合を対象に発現する打突及び攻め方の比較・検討を行うことで暫定ルールが男女トップ選手の技術傾向に如何なる変化を及ぼしたのかを明らかにすることを目的とし、以下の通り、剣道選手への指導の一助となる有益な

知見が得られた。

発現打突に関し、打突部位では男子でコテが増加した。技に関しては、一本打ちの技は男子では増加し、女子では減少した。女子は連続技と返し技が増加した。引き技は、男子では減少したものの、女子では変化が見られなかった。出ばな技、かつぎ技は前後ともに男子の方が大きい割合を示した。

攻め方では、男女ともに「構えを維持し間合をつめる」が増加し、「打突モーション(フェイント)」、「剣先を下げる」が減少した。「防御の体勢で間合をつめる」は男女ともに前後で一定の割合を示した。

以上から、暫定ルールでは構えを維持しながら、技を仕掛け、相手の打突に対しては返し技で対応するなど剣道の醍醐味を感じられる試合展開になっている傾向が見られた。一方で、防御体勢で間合を詰める攻め方やコテが増加するなど、勝利のためにリスクを回避した技術傾向も併せて見られた。

参考文献

- 1) 阿比留勇, 角正武 (2004) : 鏢競り合いの実態と選手の意識について, 武道学研究 37, 33
- 2) 馬場欽司, 小森富士登 (1989) : 全日本剣道選手権大会における鏢ぜり合いの実態調査, 武道学研究 22 (2) 143-144
- 3) 福本修二 (2003) : 0からわかる剣道審判法, 体育とスポーツ出版社, 1-161
- 4) 古川和男 (2020) : 勝って打つ剣道, 体育とスポーツ出版社, 1-125
- 5) 池田孝博, 秋山大輔, 岩本貴光, 竹中健太郎, 前阪茂樹, 下川美佳, 本多壮太郎 (2021) : コロナ禍において策定された暫定的な剣道試合・審判法は大学生レベルの試合にどう影響したか?, 武道学研究 54(1), 75-86
- 6) 今井三郎 (1976) : 幼少年剣道の指導と研究, 体育とスポーツ出版社, 1-235
- 7) 神崎浩 (2007) : 技を極める剣道, ベースボール・マガジン社, 1-183
- 8) 香田郡秀, 吉田泰将, 坪井三郎 (1986) : 剣道における間合の研究-有効打突の可能な間合について-, 武道学研究 20(2), 115-116
- 9) 香田郡秀 (2016) : よくわかる剣道審判法のすべて, ベースボール・マガジン社, 1-143
- 10) 香田郡秀 (2018) : 身になる練習法 剣道 質と実戦力を高める稽古法, ベースボール・マガジン社, 1-175
- 11) 香田郡秀 (2021) : 「主催大会実施に当たっての感染拡大予防ガイドライン」を踏まえた試合・審判法の留意点について, 月刊剣窓 473, 1-32
- 12) 香田郡秀 (2021) : 新型コロナウイルス感染症が収束するまでの暫定的な試合・審判法-ブロック別試合・審判法研修会を終えて-, 月刊剣窓 474, 1-28
- 13) 香田郡秀 (2021) : 優位に立てるコロナ禍の戦い方, 月刊剣道日本 46(12), 1-114
- 14) 國分國友 (1996) : 戦後剣道の動向-ルールの変遷と現状から-, 鹿屋体育大学学術研究紀要 15, 85-101
- 15) 厚生労働省 (2021) : 新型コロナウイルス感染症について, https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000164708_00001.html, (参照日2021年11月26日)
- 16) 鍋山隆弘, 碓氷典諒, 奥村基生 (2021) : 剣道の動作開始の二者間距離とタイミングは打突と防御の頻度を決定する-鏢ぜり合いからの別れかたの問題に対する実証データの呈示-, 武道学研究 53(2), 55-71
- 17) 中村充, 菅波盛雄, 廣瀬伸良 (1999) : 剣道における試合内容分析-第45回全日本剣道選手権大会を対象として-, 武道学研究 31(3), 26-34
- 18) 佐々木陽一朗, 瀬川剛, 有田祐二, 鍋山隆弘, 香田郡秀 (2019) : 一流剣道選手の技術変遷に関する研究-平成期の全日本剣道選手権大会に着目して-, 日本武道学会第52回大会抄録集, 40
- 19) 佐藤成明 (1987) : 剣道・攻めの定石, スキージャーナル, 1-205
- 20) 佐藤成明 (2012) : 高め合う剣道, 財団法人日本武道館, 1-563
- 21) 瀬川剛, 佐々木陽一朗, 進藤暖佳, 大野達哉 (2021) : トップレベル女子剣道選手の技術傾向

- 全日本剣道選手権大会の男女比較を通じて—, 東京女子体育大学・東京女子短期大学紀要 56, 1-9
- 22) 滝沢光三 (1968): 剣道試合および審判規則に関する研究—特に「つばぜり合い」の傾向について—, 武道学研究 1(1), 18
 - 23) 巽申直 (1986): 剣道試合時のつばぜり合いの出現頻度と所要時間について, 19(2), 161-162
 - 24) 鳥取県警察 (2004): 警察剣道試合及び審判規則の制定について, <https://www.pref.tottori.lg.jp/258279.htm>, (参照日 2021 年 11 月 26 日)
 - 25) 全国高等学校体育連盟剣道専門部: 令和 3 年度公益財団法人全国高等学校体育連盟剣道専門部申し合わせ事項, https://www.zen-koutairen-kendo.com/?action=common_download_main&upload_id=204, (参照日 2021 年 11 月 26 日)
 - 26) 全日本剣道連盟 (2009): 剣道指導要領, 1-181
 - 27) 全日本剣道連盟 (2020): 新型コロナウイルス感染症の集団発生を防止するお願い, <https://www.kendo.or.jp/information/20200405/>, (参照日 2021 年 11 月 26 日)
 - 28) 全日本剣道連盟 (2020): 対人稽古再開に向けた感染拡大予防ガイドライン
 - 29) 全日本剣道連盟 (2021): 主催大会実施にあたっての感染拡大予防ガイドライン, https://www.kendo.or.jp/wp/wp-content/uploads/2021/08/guidelines_for_competition.pdf, (参照日 2021 年 11 月 26 日)
 - 30) 全日本剣道連盟試合・審判委員会 (2021): 新型コロナウイルス感染症が収束するまでの暫定的な試合・審判法運用の質問事項及び解説, https://www.kendo.or.jp/wp/wp-content/uploads/2021/09/coronavirus-shinpanho_faq-ja.pdf (参照日 2021 年 11 月 26 日)